

現代のことは

稲賀

繁美

通勤途上の坂道に、コケモモの木がある。季節には枝先に無数の実を結び、それが地面をピンク色の絨毯に染める。だが通行する人々も中学生たちも、地面に落ちた可憐な果実には目も留めず、それらを踏みしめてゆく。勤務先

生命は惜しげもなくその子孫の種を大量に育む。だがそのなかで朽ち果てることなく世代の再生産に用立てられるものは、きわめて少数に限られる。ごく普通の野生生物でも、子孫を残せる成体に達するのは、海中ならば数百にひくとつ、猛禽類や肉食獣でも無事に巣立つのは、同じ季節に生まれた兄弟姉妹のうち、せいぜい1個体がそこら、とい

るいは梅雨に打たれて朽ちてゆく。

コケモモの実が坂道に



うのが平均値だという。

だが食物連鎖で食われた側は、捕食する側の栄養となり、死骸は腐敗菌によって分解されて、生態系の物質循環に働きかけ、生命の世代交代を助ける役割を果たす。

生命現象は、一見したところ無秩序にも等しい膨大な無駄に依存し、その極小な頂きで辛うじて循環している。それは銀河系の周縁に位置する太陽系、そのなかの第三惑星、さらにこの水惑星の海洋と大

気圏ともに、たかだか厚さ10キ程度 of 生態圏の現象に過ぎない。直径6千キロの球体から見れば、それは極薄で脆弱かつ繊細な被膜でしかない。そこに対流する海水や大気を生存の場として、地球生命体は奇跡的に生息しているに過ぎない。

そうした生息圏の内に社会生活を営む人類は、毎日のように掃除を繰り返す。掃除には終わりはない。今しがた掃き清めたはずの場所は、次の瞬間にはもう埃に覆われ、放置すれば数日のうちに塵芥まみれの無秩序な空間に逆戻りしてしまふ。だがそれなら、掃除など無意味なのか。

米本氏は、坂を転げ落ちる大きな岩の塊の影に隠れて、小石を坂の上へと運び上げようとすると、小人の姿を描いてみせる。それはギリシャ神話のシシュポスの姿にほかならない。運び上げた岩が、やがて無情にも谷底へと転落するとは十分に知りながら、岩を坂の頂きに何度でも諦めず運び続ける忍耐。それは、ヒトを含めた生命種が、地球環境から与えられた高貴なる勤め、「行」なのだろう。

否、むしろ掃除とは、無秩序のなかにつかの間だが小さな秩序を維持しようとする営みだ。不断のやり直しによってその秩序を築き続ける営み。そこに、人類の宿命とともに尊厳も宿る。そしてそれは、生命なき死の荒野の一角に、生物が小さな聖域を確保しようとして、一見無駄な努力を重ねてやまないのと、本質的にはかわらない。

宇宙は、熱力学の第2法則によって、無秩序へのエントロピー（混沌性）の増加が運命づけられている。だが科学哲学者、米本昌平氏の『バイオエピステモロジー』によれば、そこに例外的な逆エントロピーの微小環境を築く営みが、生命の定義となる。

た。（国際日本文化研究センター副所長、比較文化・文化交流史）